One Million Seeings

Published by Oji Studio, Tokyo　First Published in May 2020　©2020 Yuki Harada, All rights reserved.　Printed in Japan

[1]
原田裕規「心霊写真／マツド」
山下ビル
愛知県名古屋市千種区萱場 2-13-22 山下ビル 1F
2018 年 7 月 1 日（日）– 8 月 5 日（日）

Yuki Harada *Shinrei-shashin / Matsudo*
Yamashita Building
Yamashita Bldg. 1F, 2-13-22, Kayaba, Chikusa-ku, Nagoya, Japan
July 1 - August 5, 2018

Photo: Katsura Muramatsu

[2]
Kanzan Curatorial Exchange「残存のインタラクション」vol.2
原田裕規「心霊写真／ニュージャージー」
Kanzan Gallery
東京都千代田区東神田 1-3-4 KT ビル 2F
2018 年 3 月 9 日（金）– 4 月 8 日（日）

Kanzan Curatorial Exchange “The Surviving Interaction” vol.2
Yuki Harada *Shinrei-shashin / New Jersey*
Kanzan Gallery
KT Building 2F, 1-3-4, Higashi Kanda, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan
March 9 - April 8, 2018

Photo: Katsura Muramatsu

[3]
多和田有希・原田裕規「家族系統樹」
表参道画廊 +MUSÉE F
東京都渋谷区神宮前 4-17-3 アーク・アトリウム B02
2019 年 6 月 17 日（月）– 6 月 22 日（土）

Yuki Tawada & Yuki Harada *Family Tree*
Omotesando+MUSÉE F
Ark Atrium B02, 4-17-3, Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo, Japan
June 17 - June 22, 2019

Photo: Katsura Muramatsu

[4]
「ゲンビどこでも企画公募 2019」
広島市現代美術館
広島県広島市南区比治山公園 1-1
2019 年 11 月 2 日（土）– 11 月 17 日（日）

Open Call for Art Project Ideas 2019
Hiroshima City Museum of Contemporary Art
1-1, Hijiyama Koen, Minami-ku, Hiroshima, Japan
November 2 - November 17, 2019

Photo: Kenichi Hanada

[5-8]
『広告』Vol.414（特集：著作）
アートワーク提供
株式会社博報堂
2020 年 3 月 26 日発行

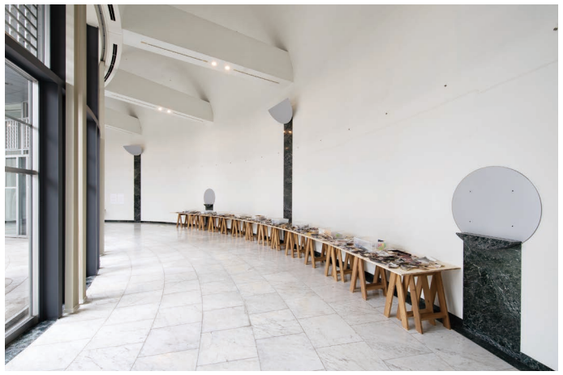
***Kohkoku* Vol.414**
Artwork
Published by Hakuhodo Inc.
First Published on March 26, 2020

Photo: Katsura Muramatsu

[1]

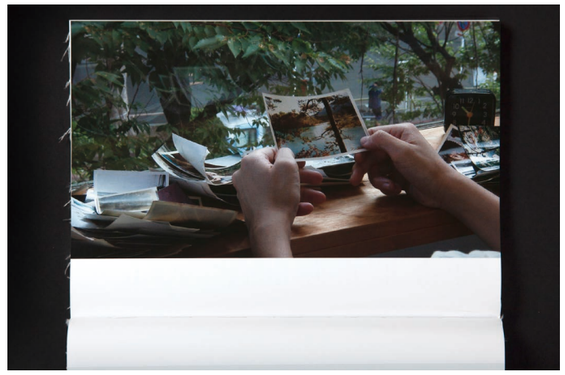
[2]

[3]


[4]

[5]

[6]


[7]

[8]

写真が山になるまで

原田裕規

ある時期から、写真のせいで筋肉痛になるようになった。倉庫を兼ねたスタジオとして古いビルの 5 階の部屋を借りているのだが、そのビルにはエレベーターがないため、何かあるたびに 1 階と 5 階のあいだを何度も往復する羽目になる。数年前から写真がぎっしり詰まった箱を抱えてここを行き来することが増えて、そのたびに筋肉痛になった。あまり知られていないと思うが、実は写真はかなり重たい。

写真を回収し始めたきっかけは、不用品回収業者や産廃業者らによって日々回収されているゴミの中におびただしい数の写真が含まれており、引き取り手もなく捨てられているという話を聞いたことだった。その実情を確かめるべく業者を取材してみたところ、現場では「売れる写真」と「売れない写真」が選別されており、前者は蚤の市やインターネットなどの市場に出され、後者はゴミとして捨てられていることがわかった。

気になったのは、取材先で知り合った業者の多くがマイノリティの方々だったということだ。とくに親しくなったのはカメルーン出身のEさんで、プライベートでも連絡を取り合うようになった。Eさんの暮らしぶりを知るにつれ、そうした写真が社会の「周縁」において日々ストックされていることがわかり、それは写真を集めている彼・彼女ら自身の「周縁」的な生き方とも重なって見えた。

こうした写真に共通しているのは、家族写真としても売り物としても何かが決定的に欠けているということだ。現代アートの領域では、持ち主不在の写真の文脈をアーティストが操作して「作品」に仕立てるという話は珍しくない。しかしこれらの写真を見ていると、そうした営みほど白々しいものはないと思う。そう考えるようになったのは、とある業者の倉庫を初めて訪問したときにある光景を目撃したからだった。

業者の運転する軽バンに先導されて辿り着いた倉庫は、外から見るとごく普通の一軒家にしか見えなかった。しかし中に入ってみると、空間のそこかしこに複数の業者がかき集めてきた物が山積みにされている。民家というロケーションも相まって、ほとんどゴミ屋敷にしか見えない。その片隅に、うず高く積まれた写真の山があった。家族の愛情からも資本主義の論理からも見放されてここに積まれることになった写真の山は、社会の全方位に向けて不満を漏らす呪われた記念碑のように見えた。図 1 ～ 4 は、そうした写真の存在を世にアピールするべく「展示」という形式を借りてそれらの写真を公開した光景である。

それに対して図 5 ～ 8 は、2020 年 3 月に発売された『広告』Vol.414（特集：著作）に掲載されたアートワークだ。タイトルは《One Million Seeings》。同名の映像作品［p.3-9］をベースにしている。24 時間かけて引き取り手のない写真を「ただ見る」様子を記録した映像で、そこから 52 枚の静止画［図 7-8］を選び出し、誌面全体に 104 ページにわたって展開するとともに、前後の見返し用に撮り下ろしの写真［図 5-6］を撮影した。この見返しの写真は、業者の倉庫で目撃した光景をイメージして、「誰にも見られていない写真の山」を朝と夜にタイマーで無人撮影したものだ。

僕にとって写真は、忘却したくても忘却できないトラウマのようなものに近い。先ほど、業者の倉庫で写真の山と邂逅したときの印象を「呪われた記念碑」と書いたが、その「何か」は、触れることすら間違っているタブーのようなものだという実感がある。だから本来は、ゴミ同然に打ち捨てられたそれを引き取ることも、光を当てることも「間違っている」のかもしれない。それでもなお、なぜだかそれを無視することができない。ある時期から写真に写った知らない人が夢に登場するようになったが、こうした写真＝イメージは、何度打ち捨てられても再帰してくる何かなのだと思う。その存在感を、自らの文脈に引き寄せることなく、むしろ向こうの文脈に引き寄せられるように、危うい体勢を保ちながらも作品として刻印することはできるだろうか？

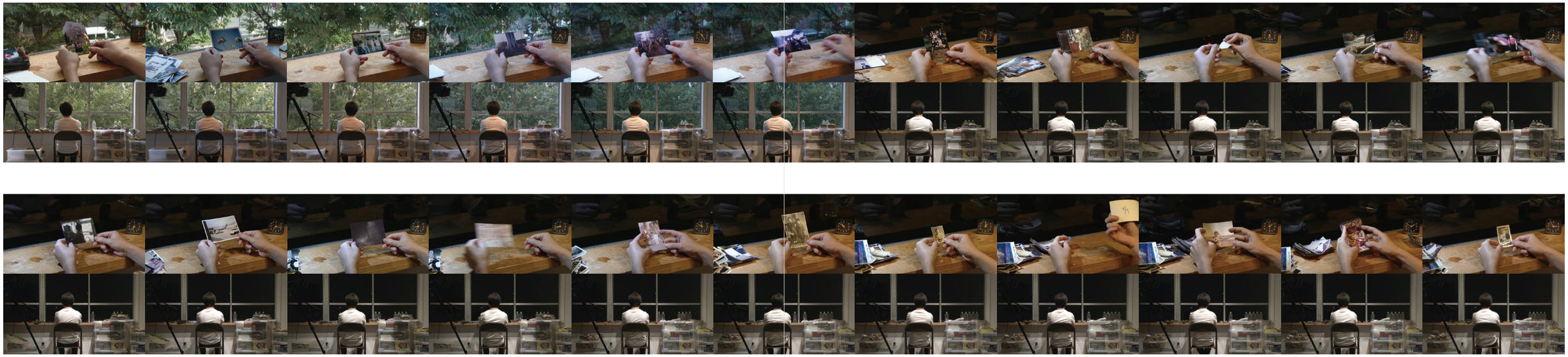
原田裕規「One Million Seeings」シリーズ
2019-

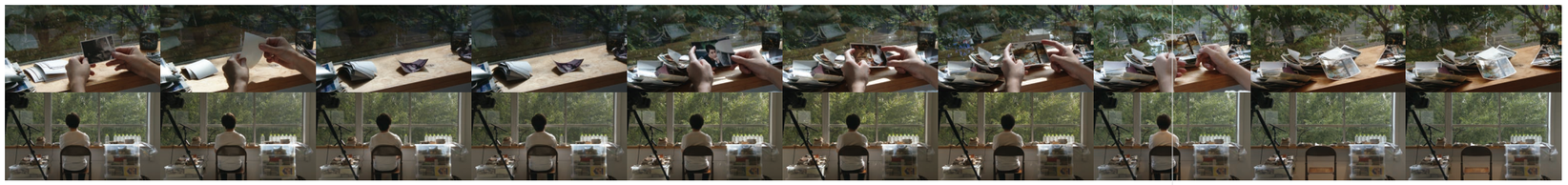
Installation view at KEN NAKAHASHI
Photo by Katsura Muramatsu

作家によって集められた「行き場のない写真」を見届ける様子を記録した映像作品のシリーズ。「行き場のない写真」の「行き場」をつくるための試みでもある。第一作は作家自身が出演し、24 時間にわたって実施。第二作目以降は、作家でない人物が出演している。一度は不要とされた写真がふたたび人目に晒されることによって、写真をめぐる親密圏が持ち主の元から、出演者の元へ、鑑賞者の元へとこだましている。

出演者は「写真との関係性が結ばれるまで見る」というレギュレーションのもと、自身と写真の間になんらかの関係性を見出そうとしている。そのため、写真一枚一枚をまなざす時間は長く重たい。それとともに、本作では「写真に向けられた最後のまなざし」をパフォーマー／鑑賞者が追認することも目論まれている。

鑑賞者にとって本作は、ランダムに立ち現れるさまざまな情景の不条理劇（スライドショー）としても見ることができる。無作為に映し出される実に多彩な写真のイメージは、そこに誰かが感情移入することを決して拒みはしない。また映像の背景では、撮影地の眼下を行き交う人々の声、パトカーのサイレン音、音楽ライブの演奏などのサウンドスケープが鳴り響き、豊かに変化する人々の営みが覆い被さるように聞こえている。





One Million Seeings

2019 年、2 チャンネルカラービデオ
24 時間 5 分 21 秒

アドバイザー：和田信太郎
アシスタント：中橋健一、村松桂
技術協力：コ本や honkbooks
撮影協力：KEN NAKAHASHI

One Million Seeings

2019, Two Channel Color Video
24 Hours 5 Minutes 21 Seconds

Adviser: Shintaro Wada
Assistant: Ken-ichi Nakahashi, Katsura Muramatsu
Technical Support: Honkbooks
Location: KEN NAKAHASHI

One Million Seeings #1
2020 年、シングルチャンネルカラービデオ
1 時間 39 分 40 秒
出演：金秋雨
撮影協力：王子スタジオ

One Million Seeings #1
2020, Single Channel Color Video with Sound
1 Hour 39 Minutes 40 Seconds
Cast: Qiuyu Jin
Location: Oji Studio

誰かの見た光景が、誰かの見た情景に変わるまで

中尾拓哉（美術評論家）

ふと展覧会に立ち寄り、映像作品を鑑賞する。開始あるいは終了の切れ目がわからず、部分的に見ただけで、見たつもりになり、通り過ぎていく。この時、「見た」という状態はどのように完了するのであろうか。あるいは、どのような感度で。

原田裕規による映像作品《One Million Seeings》は再生時間が 24 時間ある。それゆえ、この映像作品全体を見ることには多大な身体的負荷がかかる。むしろ全体を「見た」という状態に至ることを放棄させられているようですらある。原田は、定点カメラで撮影された映像の中で、椅子に座り、山積みになった写真を手に取り、しばらく眺め、淡々と重ねていく。この動作は再生時間通り 24 時間ノーカットで続けられる。

河原温による書物《One Million Years》には「過去」、すなわち紀元前 998031 年から紀元後 1969 年まで、および「未来」、例えば紀元後 1981 年から紀元後 1001980 年までというように、それぞれ 100 万年を数える年数がタイプされている。その数字は正数であり、均質である。そして、時折その厖大な数字を部分的に淡々と朗読するパフォーマンスが行われるが、しかしふとそこに立ち寄ったとしても、カウンタブルな全体と部分は質的に変化することはない。

他方、原田の「パフォーマンス」では、カウンタブルな「枚数」としての写真から、アンカウンタブルな「記憶」としての写真への移行が引き起こされる。例えるなら、河原が描いたカウンタブルな「日付絵画」に対し、対象となる日付ではなく、絵具の積層やキャンヴァスの網目に残されたアンカウンタブルな痕跡を見つめ、その向こう側にある河原が「いた」時間へと、それを 1 枚ずつ遡行させていく試みに近い。

これまでも原田は産廃業者や古物商から収集した不特定多数の人物が撮影した行き場のない写真を扱い作品を制作してきたが、それがどのようにアンカウンタブルなものとなるかは、彼自身が「写真を 1 枚 1 枚できるだけ丁寧に見ていくうちに、知らない人たちの存在が脳裏に焼き付き始め、会ったことも声も知らない人が夢に登場するなどして、トラウマ化するに至ってしまった」と語った通りである。光の痕跡――その一瞬、一瞬――のままの残像――そのひとつ、ひとつ――をカウンタブルな物質から、アンカウンタブルな記憶へと移行させる。ただし 1 枚 1 枚、カウンタブルに「見た」という状態を完了させながら。

とはいえ、衝撃的であれ、些細であれ、それらの情景ですら、完全に記憶することは不可能なのだ。だからこそ、そもそも人は写真を撮るのであり、アンカウンタブルな情景をカウンタブルな光景へと切断してきたのである。結局のところ、その全体と部分は、ふと展覧会に立ち寄り、《One Million Seeings》を鑑賞し、開始あるいは終了の切れ目がわからず、部分的に見ただけで、見たつもりになり、通り過ぎていく、という現代アートにおける映像作品鑑賞で起こりがちな、「見る」という全体と「見た」という部分の関係にもまた、そのまま、重なり合う。ゆえに、ここでの「見る」という不可能性から「見た」という恣意性への切断は、原田が「見ている」写真から、鑑賞者が「見ている」映像へとメタ的に重なり合い、入れ子構造を形成する。こうして、24 時間淡々と「見る」というカウンタブルな身体的負荷をはらんだ《One Million Seeings》を「見る」ことは、《One Million Years》の厖大な年代の羅列と、その数字を部分的に淡々と朗読するパフォーマンスに近似しつつ、写真を「見る」原田の「情景」を、その映像を「見る」鑑賞者が感情移入した「情景」として――カメラのシャッターのように――移して［＝写して］いくものとなるのである。

かつて、ある光景は、それを「見る」人の情景となり、「写真」として撮影されたその光景は、それを「見る」原田の情景となり、「映像」として撮影されたその光景は、それを「見る」不特定多数の鑑賞者の情景となる。だからこそ、その連続は、アンカウンタブルな「見る」という「情景」から、カウンタブルな「見た」という「光景」へと移していくものでありながら、アンカウンタブルな「情景」を移して［＝憑して］いくものともなりうるのである。つまり、誰かの「情景」を「光景」として切断した「写真」、そして「映像」は、「見る」という状態を通じて、奪われた時間――静止画から動画へ――と光――色料から色光へ――とを少しずつ取り戻しながら、再び記憶の次元へと還ってこようとするのだ。誰かの見た「情景」として。

原田裕規「One Million Seeings」

KEN NAKAHASHI
東京都新宿区新宿 3-1-32 新宿ビル 2 号館 5F

2019 年 10 月 8 日（火）–10 月 26 日（土）
オープニング：10 月 11 日（金）17:00 - 19:00
24 時間上映会：10 月 25 日（金）19:00 – 10 月 26 日（土）19:00

Yuki Harada *One Million Seeings*

KEN NAKAHASHI
5F, No.2 Shinjuku Bldg., 3-1-32, Shinjuku, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan

October 8 - October 26, 2019
Opening Reception: October 11, 17:00 - 19:00
Screening Event for 24 hours: October 25, 19:00 - October 26, 19:00

原田裕規（はらだ・ゆうき）
1989年山口県生まれ。美術家。
社会の中で「とるに足らない」とされているにもかかわらず、広く認知されている視覚文化をとり上げ、議論喚起型の問題を提起するプロジェクトで知られる。2012年に「ラッセン展」の共同企画でデビューし、2013年に編著書『ラッセンとは何だったのか?』（フィルムアート社）を刊行、2017年以降は心霊写真をテーマにしたプロジェクトを展開、2019年以降は「島」をテーマにしたプロジェクトを進めている。
主な個展に「One Million Seeings」（KEN NAKAHASHI、2019年）、「写真の壁：Photography Wall」（原爆の図 丸木美術館、2019年）、「心霊写真／ニュージャージー」（Kanzan Gallery、2018年）、コラボレーションに『広告』Vol.414［特集：著作］（博報堂、2020年）などがある。
2013年に武蔵野美術大学造形学部芸術文化学科卒業、2016年に東京藝術大学大学院美術研究科修士課程先端芸術表現専攻修了、2017年に文化庁新進芸術家海外研修制度研修員としてニュージャージーに滞在。
www.haradayuki.com

One Million Seeings

著　　者：原田裕規
執　　筆：中尾拓哉
編　　集：藤生新
デザイン：加瀬透

発行所：王子スタジオ
発行年：2020年6月

Published by Oji Studio, Tokyo
First Published in May 2020
©2020 Yuki Harada, All rights reserved.
Printed in Japan